

“Tourist Gaze 3.0”

Urry, John and Larsen, Jonas/Sage Publications/2011/282p.

『観光のまなざし 増補改訂版』

加太宏邦訳/法政大学出版局/2014年/379p.

評者：鍋倉 咲希

Reviewed by NABEKURA Saki

1. 本書の目的

本書『観光のまなざし 増補改訂版』は、「それぞれ違う社会や、とくに歴史上の様々な時期に、異なった社会集団の中で、観光のまなざしがどう変容、進展してきたかを見ようとするもので、「まなざしの形成と強化の過程を詳しく描き、このまなざしをだれが、あるいは何が権威づけて、その結果、まなざしの対象となった「場」がどうなったのか、またこれがどのように、他の社会現象と関係してきたかを考察」することを目的としている (p.4).

そもそも、フーコーのいう医学上の〈まなざし〉を応用した観光におけるまなざしとは、社会的に構成され制度化されたモノの「見方」を指し、観光地の社会や経済、労働や建造物に対して影響を与える行為であるとされる。観光のなかには様々なまなざしの向け方があり、観光者ごとの差異は観光と反対側にあるものとの関係性から構築される。また筆者であるジョン・アーリとヨナス・ラーセンは、本書において逸脱と結びついた観光を対象とし議論を展開することで、非・観光的な社会の基本的原理を描き出そうと試みている。

1990年、2002年に出版された“The Tourist Gaze”の第3版として執筆されている本書は、前版の構成に第7章、第8章、第9章が追加される形式で観光のまなざし論¹⁾の新たな考察が行われている。

日本においては第1版の訳書が1995年に出版されたが、第2版については内容がマイナーチェンジにとどまったため邦訳は行われなかった。今回、“3.0”ので新たな要素が加えられて原書・訳書が出版されたことは、国内の観光研究のなかで

も大きくとりあげられた。たとえば、2015年7月4日・5日に行われた観光学術学会第4回大会では、訳者である加太氏の基調講演と研究者の発表、シンポジウムが行われた²⁾。

本書、増補改訂版の構成は以下の通りである。

まえがき

第1章「観光理論」

第2章「大衆観光」

第3章「経済」

第4章「労働とまなざし」

第5章「観光文化の変容」

第6章「場と建造物とデザイン」

第7章「見ることと写真」

第8章「パフォーマンス」

第9章「リスクと未来」

訳者あとがき

参考文献

索引

2. 本書の概要

(1) 第1章

第1章では、第1節「観光の意義」において、観光におけるまなざし概念の概観とまなざしについて本書が扱う範囲について述べられたあと、観光社会学の既往研究の検討と本書の新しい要素に関する確認がなされている。

本書が扱う範囲について、具体的には主にここ200年間の観光のまなざしの発展とその歴史的変遷を考察の対象とし図式的に示すことが挙げられている。なぜこの時期を扱うのかというと、大衆観光の拡大によって多くの人々の旅行体験の視覚

化が生じ、まなごしの急速な発展が起きたのがこの200年だからである。1800年代は、それまでの選ばれた階層のみが体験できる旅行という形式が変化し、大衆観光に転換した時代であった。近代観光成立・発展の過程で、観光のまなごしは多様な角度から観光現象を構築している。

観光社会学の娯楽に関する既往研究の検討は、ブーアスティン、コーエンらによる本物性に關する議論とマッカーネル、ターナーらに代表される日常生活と観光のまなごしの対象との差異についての研究に大別され行われている。筆者らは観光者の観光行動の基底に何があるかについて議論してきたこれらの既往研究に対して、観光編制の基底にあるのは前者の観光に関する本物性の追求ではなく、むしろ後者の日常の体験とある意味で対比的であることだけだとし、観光のまなごしの現れる場を非・日常的な場であると指摘した。

本章の後半では『増補改訂版』で描かれるパフォーマンスやグローバル化といった新たな要素について論じられている。筆者らは、観光における視覚の優位性を強調しつつも、観光者とホスト側社会のパフォーマンスがいかに観光のまなごしと関わり合うのか明確化する必要性について述べた。

第2版からも変化をみるグローバル化に関しては、それが様々な物事の消費の拡大を促し、観光が及ぼす何らかの影響が再帰的に観光の姿を変えていく「観光反射機能」を活発化させることを指摘した。筆者らはグローバル化と観光が複雑に絡まり合い相互に依存、影響しあいながら一連の流れを作り出していることを主張し、まなごしのグローバル化に着目する。

したがって第1章では、既往研究の整理とともに非・観光的な社会に対比する形で成立する観光のまなごしの概念整理とともに、増補改訂版で見られる観光におけるパフォーマンスやグローバル化など新しい要素の検討がなされた。本章は第2章以下に続く観光のまなごしに関する諸議論の傘を担う部分になっているとすることができる。

(2) 第2章

第2章では、ブラックプールやモアカムといった英国の海浜リゾートの成立とその社会的背景を追いながら、大衆観光の成立について述べられ、海浜リゾートが社会の階級と密接に絡み合いなが

ら発展してきた様子が明らかにされている。

19世紀後半、筆者らが旅行の「民主化」と呼ぶ大衆観光は北イングランドの工業地帯の裏町で起こった。民主化とは、上流階級の特権であった旅行が、当時台頭し始めた労働者階級にも行えるようになったことを指している。その社会的背景としては、産業構造の変化による労働者階級の経済水準の向上や共同体の成立、作業重視型から時間重視型への労働の合理化の進展、交通手段の大幅な改良などがあげられ、労働のために休暇が必要なこと、休暇は集団で行うことなどといった価値観が英国の労働者の間で構築された。

また強力な産業を持つ産業後背地と固く結びついて成立したいくつかの海浜リゾートが発展するに従い、社会的色調に変化が現れはじめ、その要因が土地所有の型と景観の魅力度という2つの交点によるものであることが指摘されている。

それらの社会的色調は、言うまでもなく社会制度としての階級とも関係が深く、筆者らは海浜リゾートがステータスを争い文化資本を争奪していく場であったことを主張する。

つまり第2章では、英国の海浜リゾートの具体的な発展事例が示されつつ、集合的まなごしを生み出す大衆観光の発生、また観光地と階級の関係について明らかにされている。

(3) 第3章

第3章では、観光サービスの生産者と消費者の社会関係に重点を置きながら、観光産業を「経済的」決定要因からのみ議論するのではなく、むしろ観光の政策的・文化的経済の変容の展開に焦点を置いて考察している。

観光商品の購買に関する変化は大量消費と脱フォーディズム消費から分析されている。そのような観光者の消費形態の変化は、グローバル化やWeb2.0革命、体験経済の発展やディズニー化の進展を背景に成立しており、サービスがもはや便益を供与するものではなく感動の舞台となっていることが指摘される。

観光産業に大きな変化をもたらしたグローバル化は、大衆観光から自由旅行への展開をもたらし、観光地の分業体制を成立させた。またWeb2.0革命はネットワーク経済を可能にし、観光に伴う購買行動の質を変化させた。

後半部分では観光地のホストとゲストの社会関

係に関する決定因が11の項目から示される。筆者らは、それらの決定因から生み出される観光行為の社会的影響は観光地を変化させており、観光者・ホスト社会両方の社会構成が観光産業を作り出している点を指摘している。

つまり第3章では、観光産業の構成について社会的要素を踏まえつつ考察されている。産業内部には複層的な社会関係が存在し、それが観光商品の生産・消費に繋がっているのである。

(4) 第4章

第4章では、観光行為に内在する観光行為と観光者のための種々のサービスという二項目のうち、後者についての議論が展開されている。接客業とも呼称される観光サービスは、第3章でも触れられたように、まなごしの多様性によって当の観光商品がしばしば不明瞭であることから極めて複雑である。

筆者らはスカンジナビア航空のいう「真実の瞬間」などの事例を持ち出しながら、サービスの特徴について4点を指摘した。第一に多くのサービスの産出が“状況”依存であること。第二に、様々な消費者グループによって懐かれる期待にはバリエーションがあるということ。第三に、サービスの質が多様化し、個別に対応するには困難を要すること。最後に、サービス商品は無形であり、感情や身体に関わる一瞬がサービスの質を決めているということである。さらに筆者らは、これらの特徴が飲食サービスにおいて顕著であることを示している。

また観光産業の雇用の弾力性と流動性の分析から同産業における性差問題にも触れられている。すなわち労働の形態や規模は明白な男女差を形成させ、さらに弾力的な労働慣行が非熟練労働者を生産し続けることが指摘された。そして労働者の流動性については、いまやホスト・ゲストの明確な境界が存在しない場合があるとも述べられている。

したがって第4章では、観光について接客業の社会関係に焦点が当てられ、接客を形成する種々の経済、政治、民族的背景が観光のまなごしと相互に影響しあっている様子が明らかにされている。

(5) 第5章

第5章では、近年見られる観光のまなごしの概

念枠の大きな変容をさまざまな分野の脱分化、新興中産階級の嗜好戦争、観光のメディア化などの側面から論じている。第4章までに、観光のまなごしは日常の社会活動と明確に区別され、特有の場、特有の時に発生することが示されてきたが、筆者らによると、ここ2、30年の間に構造的差異化の崩壊が起こっているという。

構造的差異化の崩壊を理解するうえで検討されているのは、水平、垂直あわせての文化的分化の構造を持っていたモダンから、それらの構造の脱分化を果たしたポストモダンへの移行についてである。ポストモダンについてはアンチ・アウラであることや文化の生産者と消費者の脱分化構造、さらには「表象」と「実態」の区分の不明瞭性などの特徴を指摘することができ、ここでは観光のモダン・ポストモダン両側面の特異性が論じられている。

また、新興の中産階級の文化行為についてブルデューの『ディスタンクション』を引用しつつ説明している。メディアの拡大・発展によってかつて階級ごとに区別されていたハビトゥスを形成する種々の様式は坍塌状態に陥っており、観光の様々な場面においても価値の転換が起こっている。具体的な例としては田舎へのイメージや「風景」の消費から説明されている。

最後の項ではポスト・ツーリズムの潮流について、ポスト・ツーリストの特徴から述べられる。そのような観光者はモダンの分化構造を脱し、主観的な遊戯性や変化を求め観光行為を行う。また彼らは観光において唯一とか正当な観光体験がないことを知っており、観光がゲームの連続であることを知っている。筆者らはポスト・ツーリストの登場が観光のまなごしの生産と消費の一連の過程を変化させていると指摘した。

したがって第5章では近年の観光行為の大きな変化について、現代文化におけるさまざまな境界の融解を検討することで明らかにしている。

(6) 第6章

第6章では、観光者の種々のまなごしによって作られ、作り直される場に注目している。筆者らによると、観光の場は、固定的で所与のものではなく、資本、人間、モノ、記号、情報の網目状の運動を通して経済的、政治的、文化的に生産されるものである。本章では、観光者がまなごしを投

げかける建造物とデザイン、場の諸関係について議論がなされる。

まず議論されているのはモダン建築を取りまく現代の建造物についてである。ラスベガスやバースを事例にあげながら、モダンに対する脱機能性や、遺産への憧憬化、地域性などが分析されている。

また、現代建築の特異な様相として、場の選択的移入を行い自己完結型余暇装置として総合的かつ統一的な空間構成が行われるテーマ空間について明らかにされている。テーマ空間においては環境の保護膜のなかで地理上の表象が選択的に創出され、ハイパー・リアルな対象物が生み出される。しかし、ある意味地域性を極限まで創造したそれらの空間に対して筆者らは、インターナショナル様式のモダン建築に対してもっと個別のコンテキストやアイデンティティに敏感であるべきと批判したポストモダニズム式テーマ化は、もはやローカルの記号や様式を相手にしていないという点で逆説的にグローバルになってしまっていると指摘している。

建造物と観光というテーマにおいては遺産観光が大きな位置を占める。筆者らはヒュイソンの遺産とノスタルジアの議論の引用から、遺産が持つ効果や遺産への態度が社会環境を反映していること、遺産への憧憬が国家のナショナリズムの戦略と結びついていることを明らかにしている。

ポストモダンの反選良主義において、美術・博物館が変化していることも興味深い。人々はいまや権力が決めたアウラのなものではなく、より「平俗」で、民衆的なものに興味を持つようになっていく。美術・博物館はマルチメディア化が進み、学術目的の収集機関から情報伝達の方途として変化を遂げた。

つまり第6章では、現代の多くの観光地がテーマ化のなかにあること、場は観光のまなざしの影響やそれを取りまく社会関係によって常に刷新されるものであることが明らかにされている。

(7) 第7章

第7章では、観光現象において強い政治性を持つ写真が、観光のなかでどのような機能を持ち、人々を動かすのか、写真がいかにまなざしを構成しそれを展開させていくのかという観点から視覚と観光のまなざしについて分析されている。

写真は近代観光が大幅に発展した1840年代以降、観光と互いに結びついて不可逆的な発展を遂げ、観光のまなざしを進展・拡大させた最も重要な技術であった。筆者らは写真が登場して以降、観光のまなざしが移動する近代世界に参入し世界を作るようになったことを主張している。

写真がもたらした大きな効果は、人に見る技術を通して世界をつかみ取る方法を習得させたことである。観光の現場に、写真を撮る行為が新たなハビトゥスとして普及したのは1890年代のことであり、先駆となったコダック社は家族の生活や思い出に対して宣伝を行い、文化として再帰的效果を持ちうる“観光的”写真を創造していった。一方商業写真においては、プロの写真家と観光者の写真が相互的に影響しあいながら、観光地のイメージを形成し、場を構築していく過程について述べられている。観光の広告写真は場を舞台化すると同時にストーリーによって受容者を刺激するのである。

最後に、通常の写真行為に潜む撮影・対象・消費の3つの空間を大幅に接近させた写真のデジタル化とインターネット化について触れられている。筆者らはそれらの技術発展に伴い、写真を消費し削除することも生産行為の一部となり、消費者社会のなかで「自己表現」が新たな重要性を持ち始めたことを指摘する。デジタル化は写真に新たな存在の形をもたらしことになった。

したがって第7章では、視覚の近代性から現代のデジタル化を追うことによって、観光における写真の重要性と、観光のまなざしとの相互的な発展について明らかにされている。

(8) 第8章

第8章では、増補改訂版の新しい要素として、1990年代に観光理論のなかで起きたパフォーマンス転回やゴフマンの〈演出法の社会学〉に注目しながら、観光行動のなかのまなざしとパフォーマンスの関係についての議論が展開されている。

筆者らはまずパフォーマンス転回の特徴をゴフマンの社会学との共通項から明らかにしている。そこでは観光者が視覚以外にも多種多様な感覚を用いて観光行動を行っていることやパフォーマンスが一部制度化されたものであること、アフオーダンスが観光者の感覚へ影響することなどが列挙されていて、既往研究が観光現象を静態的・テク

スト的に読み取って来た事実に対してパフォーマンス転回が異議を示したことが描かれている。

後半部分では第7章まで議論してきたまなざしと観光に関わる諸要素の関係を振り返りながら、それをパフォーマンスと照らし合わせ、観光行動におけるパフォーマンスとまなざしの関係が、観光者の社会関係を表象し構築する可能性について、場や写真、ツアーに伴う集合的まなざしを例に説明した。

したがって第8章では初版・第2版が示した観光のまなざし論における視覚への優位性に対する批判に応答するとともに、まなざしやパフォーマンスを伴う身体が種々の社会関係を体現するものであることが示されている。

(9) 第9章

第9章では、現代の社会情勢に対して観光行動に伴うリスクや観光のまなざしの集中が引き起こす観光地への負担、そして地球の資源と観光の関係という具体的な事例が示されつつ、国際観光の現在と未来の動向に焦点が当てられている。

筆者らは現代の観光行動における様々なリスクについて、観光がしばしば死や災害と結びついて成立する状況があることや冒険観光、テロのような身体的なリスクなどの事例から明らかにしている。

また、観光現象が引き起こす悪しき影響についても地域の環境破壊や騒音などの事例があげられた。さらに筆者らはハーシュの述べた観光の成長と位置の経済の議論から、ロマン主義的まなざしや集合的まなざしといった種々の観光のまなざしが、観光地の持つ位置財と切り離せない関係にあることを指摘している。

観光と資源の関係に関しては、石油や地球の環境資源に観光産業が依存していることについて述べられ、それらの関係を勘案して2050年の観光や移動について3つのシナリオが示されている。

本書の最後の節である「ドバイ首長国」では、現代の観光、観光のまなざしが皮肉的に描かれる。世界各地の地域を収集し、まなざしを向け、他と比較し、その情報をWeb2.0で開示して文化資本を獲得していく観光者は、種々のリスクと今後いかに向き合っていくのか、観光のまなざしが2050年になっても広くふつうのこととして存在しているのか、筆者らは読者に疑問を投げかける形で本書を締めくくっている。

3. 本書の意義

本書では、社会的に構成され制度化された観光のまなざしが観光を取りまく様々な事象にどのように影響を与え、他の社会現象と絡み合うなかでいかに動いているのかという問いのもと、種々の議論が展開されてきた。では、改訂を加えて現代観光をより詳細に描き出した本書の成果として、いかなる点があげられるだろうか。ここでは、観光のまなざしそのものの意義よりも、改訂から見える観光学における本書の意義について検討したい。

加太は、本書の「訳者あとがき」にて改訂の内容を①観光における視覚の意義を身体へシフトさせているゴフマンの〈演出法〉理論の登場、②グローバルゼーション概念を移動社会概念から捉え、考察した点、③移動社会の進展に伴う反動現象と近年のテクノロジー発展を踏まえた〈観光反射機能〉の議論の3点から指摘した。

具体的にあげるならば、まず第2版までの『観光のまなざし』において、観光に関わる人々が受動的であり、また観光において視覚が優位性を持つとされていたことに対する種々の批判を受け止め、第8章のパフォーマンス論を展開している。また移動社会については、アーリの近年の著作を含めて、グローバル化が進むなかでの観光について、システムと人間の相互依存関係を論じている。特に第9章では、システムや石油に代表される地球上の資源に依存している観光の現状に触れ、現在・未来の観光におけるリスクを示している。また〈観光反射機能〉については、近年のテクノロジー発展、ことに観光客によるインターネットでの情報発信や観光地イメージをヴァーチャルに消費することが観光現場に再帰的に影響を及していると主張している。

本書の意義のひとつとして、阿部(2015)の指摘を取り上げたい。彼はアーリの提唱する移動論的転回のなかに『観光のまなざし 増補改訂版』を位置づけ、本書の意義として、一見純粋で主体的に見える人間のさまざまな知覚・表象行為の様式が、いかに非人間的なモノに媒介されたシステムの上に成立しているかを示した点であると指摘している。

阿部は、アーリがシステムとの関係を重視し、観光客の主体性がシステムや物的領域と強固に絡

んでいる点に注目していることを踏まえ、その意識を観光研究へ応用することを提唱する。すなわち、観光とシステムのつながりを注視するならば、観光研究の射程は、既存の範囲からより拡張されるべきであり、「正常な」社会を土台として成立する非日常としての観光は、その土台を考えるための重要な要素となるというのである。

一方で、観光のまなごし論に対する批判は、安村(2004)が第2版に対して指摘した点がいまだ残されている。すなわち、アーリがフーコーの理論を応用しているにも関わらず、観光のまなごしの定義について「社会的に構成され組織化される」とだけ述べるのは、観光のまなごしが多様な現実をありのままに受け入れる器として措定されることを示しており、その結果観光のまなごしは無限に多様になり、收拾のつかない状態になる、ということである。

また前述のシンポジウムのディスカッションのなかでは、フィールドワークに基づくエスノグラフィックな事例がないこと(須永, 2015)や、本書が「見る行為」そのものがはらむ権力性に深く言及していないこと、参考文献や事例が西欧に偏っていることなど種々の批判がなされている点を見ると、観光のまなごし論はさらなる精緻化が必要である。

そのための方法のひとつとして、まなごし論を土台とした事例研究を増やしていくことがあげられよう。現場に即した分析を行うことにより、筆者らが指摘したそれとは異なったまなごしの向け方やパフォーマンスのあり方を発見することができる。

初版の発行から20年経過した現代において、観光自体の姿も大きく変化した。特に写真や携帯電話、通信手段、交通手段などのテクノロジーの発展は、観光の新たな様式を生み出し続けている。

前述した阿部は、アーリの移動論的転回と本書を結び付け、観光におけるシステムの重要性について言及した。しかし彼の指摘からは、あくまで社会が観光の土台にある、すなわち社会が観光を変える、という一方向的な様子しか読み取ることができない。しかし、実際には社会と観光の関係には相互性があり、非日常である観光が社会を変える状況も現れている。たとえば観光はただテクノロジーを土台として成立しているだけでなく、その発展を加速させた重要な要素のひとつでもあ

る。また、日常世界に位置しているショッピングモールが観光体験を想起させるテーマ化に向かうような現象は、日常世界がシステムとして観光に影響を及ぼしているだけでなく、少なからず観光から影響を受けていることを意味している。

本書は、システムに再帰的にはたらく現代観光の姿を適切に捉えることに成功している。アーリ自身は、あくまで「正常な」社会を見る指標として観光を分析する態度をとっているのかもしれない。しかし本書をより観光学に引き寄せて再考するとき、本書で分析された観光の社会への再帰性は、観光学の要である「観光とは何か」を探る重要なヒントになるだろう。今後、観光学者は本書の締めくくりの投げかけに応答する形で、観光の本質をめぐる理論的探求を続けていかなければならない。■

【付記】

本稿の内容には、2015年度立教大学観光学部「演習(3年)A・B」での成果が大きく反映されている。演習への参加を許可して下さった千住一先生、一年間ともに本書を読み込んだ佐々木健太郎、西野遼の両氏に深く謝意を表します。

【注】

- 1) 本稿では、「観光のまなごし」という用語を本書のなかで示されている知覚動作として扱い、「観光のまなごし論」を観光のまなごしを取りまく一連の議論・理論と規定する。
- 2) 本稿を執筆するにあたり同シンポジウムで交わされた議論も参照している。

【参考文献】

- 阿部純一郎(2015):「移動論的転回」の中に「観光のまなごし」を再定位する。観光学術学会第4回大会発表要旨集, 8-9.
- 須永和博(2015):他者化に抗する観光実践:釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを事例として。観光学術学会第4回大会発表要旨集, 14-15.
- 安村克己(2004):観光の理論的探求をめぐる観光まなごし論の意義と限界。遠藤英樹・堀野正人編、「観光のまなごし」の転回—越境する観光学, 春風社, 8-24.
- Urry, John. (1990) *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Los Angeles: Sage Publications, 282p.(=加太宏邦訳(1995)観光のまなごし—現代社会におけるレジャーと旅行, 法政大学出版局, p289.)